

「一日一ミリ」。挫折を経験した生徒たちの心に寄り添い、激励する言葉。完全不登校の生徒の受け入れに特化した保田学園保田高等学院（広島市中区）学園長の保田隆さん（59）は、「頑張りななくていい。自分を信じて進めばいい」と、そっと背中を押す。

プロミュージシャンを目指していた保田さんは大学卒業後、高校教員を14年間務めたが、退職。学力重視の学校方針に



保田学園保田高等学院 広島市中区学園長 保田 隆さん

なじめず自身が「不登校教師」になった。その時に出会った高校生がきっかけで、つまづいた子どもたちを支援する教育に取り組み始めた。

心がけているのは、「教えて分かって『教育』ではなく、共に育んでいき分かつてあげる『共育』だ」と語る保田さん。学校の現状や展望を聞く。

2面に続く

＜保田学園保田高等学院（学校法人神村学園高等部通信制課程広島学習センター）＞所在地は広島市中区紙屋町。完全不登校または特別な支援が必要な生徒に特化した学校で、神村学園（鹿児島）と業務提携し、高校卒業資格取得のための学習サポートや社会で生きる力を育む。保護者への支援も行う。

「川島宏治のプラス1」は月1回掲載します。

中国新聞グループのケーブルテレビ 5ch COMで放送中!

川島宏治の プラス1

1面から続く

保田学園保田高等学院(広島市中区)学園長 保田 隆さん

「保護者の笑顔を取り戻すことが、生徒の苦悩を解決するための最初の一步」と川島さん(右)に語る保田さん



やすだ・たかし 1988年から広島県内の私立高校で社会科教員を務める。並行してシンガー・ソングライターとして自作曲を多数制作し、ライブ活動も行う。2002年教職を離れて音楽活動を全国展開。2年後、教職に戻り不登校生徒を支援する教育に携わる。22年から現職。広島市南区出身。59歳。

らギターを出し、当時の歌詞カードを見ていたら夜が明けた。「俺はこんな思いを持っていたのだ」と気付き、翌日のホームルームで「CDを作る」と答え、3秒くらい沈黙した後、「鏡を見たことある？」と爆笑されました。それから学校が終わった後、ギターを手にいろいろな所に向いて「歌わせてください」と活動を始めました。

開かずの部屋のドアの前に座り、不登校の先生になった自分の悩みなどを1時間ほど語りかけました。半年ほど続いたある日、ドアが少し開き、その子と初めて対面できた。その後、外に出る練習を始めました。人がいなくなった夜、「あの電柱まで一緒に歩こう」。私も社会復帰の練習をするためコンビニのバイトをスタートしました。

「2人とも復帰できてよかったですね。」

何年か後にその子が、「あのときドアを開けた理由が分かる？」と尋ねてきました。「分かる」と言うと、えへつと笑いながら「ドアの向こうから大声が毎日聞こえてきて、時にはギターの音を聴く。世の中にこんな格好悪い不器用な大人がいるんだ。この人と一緒にいたら、私は変えられるかもと思った」。

そして、「世の中には私よりも苦しんでいる子がたくさんいるから救ってあげて」。それを聞いてからは一ミリの迷いもなく今日まで突っ走ってきました。

「ミュージシャンの夢は持ち続けていますか。」

ほほほいです。子どもたちや保護者とともに生きていることが楽しいので。この場所を必要としている方がいる限り、やり続けることが今の夢です。

放送は、ちゅP COM尾道局で15日まで。時間は中国新聞などで確認をお願いします。

「親子のつまずきの原因は、放任よりも型にはめ過ぎることが多いと思うですね。」

今は過干渉の方が多いと思います。本校が他の通信制高校と違うのは、全く学校に行っていない生徒しか入れないことです。勉強ができてなくても周りの子を見て、「私だけではなかったんだ」との安心感があるので、自分を責めることなくスタートが切れます。勉強が分かる喜びを知ると、どんどん知りたいと興味を持つようになります。ぐんと伸びます。大学に結構な人数が進学していますよ。

教員は教えることより、子どもたちから教えられることがはるかに多いです。子どもたちとときどきぶつかりますが、振り返ると、生徒の言い分が正しいことが多い。なので翌日に謝ります。その繰り返しです。

「大人は理屈でひっくり返そうとする部分がありますよね。」

子どもたちは考える前に感じたまま動こうとしますから。それを人に言うって傷ついてきた子が多く、だから人に自分の思いを伝えることがすごく苦手なのです。ここでは思いを言っているのだと思います。

「保田さんは、もともと教員志望だったのですか。」

小さい頃から歌手になりたくて、それしか考えていませんで

した。しかし教員になってからは暇がなくてね。30歳の時、自分のクラスの生徒の一言から、「もう一度音楽を」と再び夢を追い始めました。

「その一言が気になります。」

生徒に「夢を持って」といつも話していたら、生徒から返ってきたのです。「じゃあ、先生の夢を言うてみんさいや」。自分がミュージシャンになりたかった時に戻りましたね。ケースか

く日々が始まった。

「親友からの電話で、その子の家を訪ねました。内側から鍵がかかった部屋。いじめに遭っていたのに無理に登校させた。母親は「私が悪かった」と涙を流しました。自分が受け持った生徒にもこんな思いをしていた子がいたのではと考えていた帰りの道、「あれ、今日の俺はしんどくない」と気付いたのです。」

「それから、その子の所に行く日々が始まった。」

教えるより子に教えられることが多い

放送は、ちゅP COM尾道局で15日まで。時間は中国新聞などで確認をお願いします。